つなぐ —— 小家、技・家の教育情報誌 —— ひらく

2026

Volume 04

KGK 家庭 JOURNAL

SPECIAL FEATURE

FOSTERING COMMUNICATION



特集

コミュニケーション力を育む

KAIRYUDO

INTERVIEW
タズネル

人とつながるということ

株式会社オリィ研究所
共同創業者 代表取締役所長 CVO
Yoshifuji Ory **吉藤 オリィ**

自身の不登校経験や寝たきりの親友との出会いをきっかけに、分身ロボット「OriHime」や「分身ロボットカフェ」を生み出した吉藤オリィ氏。人と関わり、誰かに必要とされる「役割」をもつことが、人の心にどのような変化をもたらすのか。技術が進歩する時代における人間関係のあり方や、人とつながる意味について、お話を伺いました。

一人では育たない自信

24歳になった頃、20年間ずっと病院で寝たきりの生活を送ってきた親友と出会いました。彼は人との付き合い方がわからないことに悩んでいました。インターネットで大勢の人にメッセージを送っても、正しいマナーや言葉遣いを注意してくれる大人がおらず、フィードバックが得られないまま無視されたりひどい言葉を投げかけられたりして傷ついていたのです。叱ってくれる人もいなければ、誰かから「ありがとう」と感謝された経験もありませんでした。かつて、3年半ほど学校に通えず、生きる気力すら失っていた時期があった私にとって、20年もの間、外に出られないまま一人で自我を保ち続けてきた彼の存在は大きな衝撃でした。そんな彼と夜な夜な語り合うなかで、私たちはある一つの確信に至りました。それは、自分を信じる力（自信）や自己肯定感というものは、一人で部屋に閉じこもって考えていても決して育まれないということです。人は、誰かと出会い、言葉や気持ちを交わし合う体験を通して、本当の自信をもてるようになるのだと思います。

彼がよく口にしていたように、体が動かないことや外出できないことの本当のつらさは、移動できないこと以上に人生に出会いと発見がないことにあります。社会のなかで誰かに必要とされる役割をもてないと、人は「自分なんていなくてもいいのではないか」と自らの存在価値を見失ってしまいます。そこで移動の壁を越えて人と出会い、役割をつくるために開発したのが分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」でした。

オリィ研究所　共同創業者 代表取締役所長 CVO。自身の不登校体験をきっかけにロボット開発を始め、高校時代には科学コンテストで入賞。早稲田大学にて機械工学を専攻し、在学中に同社を設立。「孤独の解消」を研究テーマに掲げ、メディア出演や全国での講演活動などを通じて自身の考えを幅広く発信しながら、テクノロジーで人と社会をつなぐ挑戦を続けている。



役割が人を育てる「分身ロボットカフェ」の実践

この思想を具体的に試す場として作ったのが、現在私たちが運営している「分身ロボットカフェ」です。ここでは、重度障害のある方や、長年引きこもっていた人々が、OriHimeを遠隔操作して接客業務を行っています。

なぜ接客なのか。それは、接客業こそが自分のしたことに対して、目の前の相手から直接リアクションが返ってくる場所だからです。自分の言葉やおもてなしでお客さんが笑顔になれば、「自分でも人を喜ばせることができた」という確かな実感が得られます。その笑顔の反響や「ありがとう」という言葉こそが、折れていた心を回復させ、人と関わる勇気と自信を取り戻すきっかけにつながります。

また、このカフェでの実践は、AIやロボットが進歩する現代社会に対する一つの問いにもつながっています。技術の進化によって人間が何もしなくてもよくなる一方で、一人で何でもこなせて誰にも頼らずに済む世界は、見方を変えれば誰からも必要とされない世界になってしまうのではないでしょうか。

これからの時代、一人で作業をこなす能力の価値は下がっていきます。むしろ重要になるのは、「自分にはこれができない」「ここで困っている」という弱さや課題を素直に開示することです。自分のできないことを自覚しているからこそ、テクノロジーや周囲の仲間と手を取り合い、新しい役割や出会いをつくりだしていくことができます。できないこと自体が、人と人を深く結びつける新たな価値になるのです。

人とつながる意味

このように考えていくと、本当の意味でのコミュニケーションの姿が見えてきます。コミュニケーションとは、単に人前で上手に喋るテクニックを身につけることや、対面でうまく会話をこなすことだけを指すのではありません。自分のできないことを受け入れ、他者と関わり、誰かに喜ばれる役割をもつこと。そして、感謝し感謝される体験を通じて「自分はこの社会にいていいんだ」と自らを肯定できるようになること。これこそが、私たちが人と関わり、コミュニケーションをとる本当の意味なのではないでしょうか。

誰もが人と出会い、役割を持ち、お互いを必要としあっていける社会を目指して、私はこれからも挑戦を続けていきます。









TOPIC
ミツメル

よりよい生活を共につくる コミュニケーション能力

東京学芸大学　教育学部　教授

博士（学術）専門は家庭科教育学。ライフスタイル形成や生活価値観醸成に関わる家庭科の学びに着目し、国内外の家庭科カリキュラム研究を行っている。共著書は『初等家庭科教育法: 気づく・考える・実践する力を育む授業づくり』（萌文書林）など。

渡瀬 典子
Watase Noriko



1 「コミュニケーション能力」とは

皆さんは「コミュニケーション」と聞いて、どのようなことをイメージされるでしょうか。国語辞典では、「ことば・文字などによって、おたがいの考えや意見を伝えること」と説明され（三省堂，2024）、教育政策においても、主に言語による他者とのコミュニケーションが重視されてきました。

「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ（素案）」（中央教育審議会,2026）にも、言語能力や情報活用能力などの学習の基盤としての資質・能力を構成するものとしてコミュニケーションが言及されています。

文部科学省の有識者会議（2011）は、コミュニケーション能力を、異なる価値観や背景をもつ人々との相互理解や共感を基盤として、人間関係やチームワークを形成し、対話を通して、合意形成や課題解決を図る能力だと述べています。したがって、コミュニケーション能力とは、言語による「話す・伝える」力の他に、言語・非言語による伝達と受容を双方向に行いながら、理解を深めていく総合的な能力と捉えることができるでしょう。（図1）

2 家庭科で育み、発揮される「コミュニケーション能力」

家庭科では、他者との関わりや地域・社会とのつながりの中で生活課題を見いだし、考え、協働して解決する学習過程を通して、コミュニケーション能力が育まれ、発揮されていきます。

図1は、家庭科におけるコミュニケーションを、「言語／非言語」と、情報の「発信／受信」という二つの軸から整理したものです。

「①非言語で伝える・働きかける」では、言葉を使わずに気持ちや意図を伝え、相手が参加しやすい雰囲気をつくります。例えば、協力して調理や片付けを進める行動などが挙げられます。「②言語で伝える・働きかける」では、自分の考えや希望、意見、提案などを言葉で伝え、相手との理解を深めていきます。各自の状況に合った家事分担の提案や、様々な活動計画についての話し合いなどがその例です。

一方、「③非言語から読み取る・感じ取る」では、表情や態度、視線、行動、声の調子などを手掛かりとして、相手の気持ちや状況を理解しようとします。「④言語を聴く・読み取る・理解する」では、相手の話や文章、資料などから、考えや意図、背景を捉え、相手の立場に寄り添って考えます。

児童生徒が、相手の言葉や態度から得られる情報を丁寧に読み取り、同時に自分の考えも相手に伝わるように表現する。その過程に、一人ひとりの発見や、その人なりの解へのアプローチが生まれるのではないでしょうか。

例えば、開隆堂の小学校家庭科教科書では、家族や周囲の人とのつながりを感じ、温かい気持ちになれるふれあいや団らんの時間を「ほっとタイム」と呼び、お互いよりよい時間にするためのコミュニケーションを考える内容があります（図2）。中学校家庭分野教科書では、立場の異なる他者の心情を推し量り、発言の意図や行動の背景を考えるロールプレイも扱われています。

このように、実生活そのものを学習対象とする家庭科では、コミュニケーション能力を発揮し、他者へのケア意識を育む場面が多くあることが他教科にはない特長だといえるでしょう。

3 これからの社会を見すえて ーよりよい生活を共につくる力ー

これからの社会では、家族や地域、ライフスタイルが一層多様化すると予想されます。そのような社会において、誰もが自分らしく、他者と支え合いながらよりよく生きるために必要な、普遍的な学びとは何でしょうか。

その一つが、現実の生活に根差した「対話と協働の経験」を積み重ねる学びです（図3）。そこには、他者との対話だけでなく、自分自身に問いかける「自己内対話」も含まれ、探究的な学びにもつながります。そして、その学習を支えるのが、相手を尊重する姿勢、共感、自己理解、他者理解などの「コミュニケーションの土台」です。

実際のところ、他者とわかり合うことは容易ではありません。相手の思いを正確に捉えられないこともあれば、自分自身が何を思い、何を望んでいるのかを自覚できないこともあります。先を見通しにくく、生活上の様々なリスクへの対応が求められるこれからの社会では、困ったときに誰かを頼り、助けを求め、支援を受け入れる「受援力」や、人々とのつながりを形成する力も、重要になるでしょう。

家庭科におけるコミュニケーション能力の育成は、単に「上手に話す・伝える」ための力を育てることではありません。多様な他者と対話し、理解し、調整し、協働しながら人とつながり、よりよい生活を共につくっていく力を育むことです。生活のリアルに向き合う家庭科だからこそ、この力を育てることには大きな意義があり、これからの社会において、その重要性はさらに高まっていくのではないでしょうか。

図 1

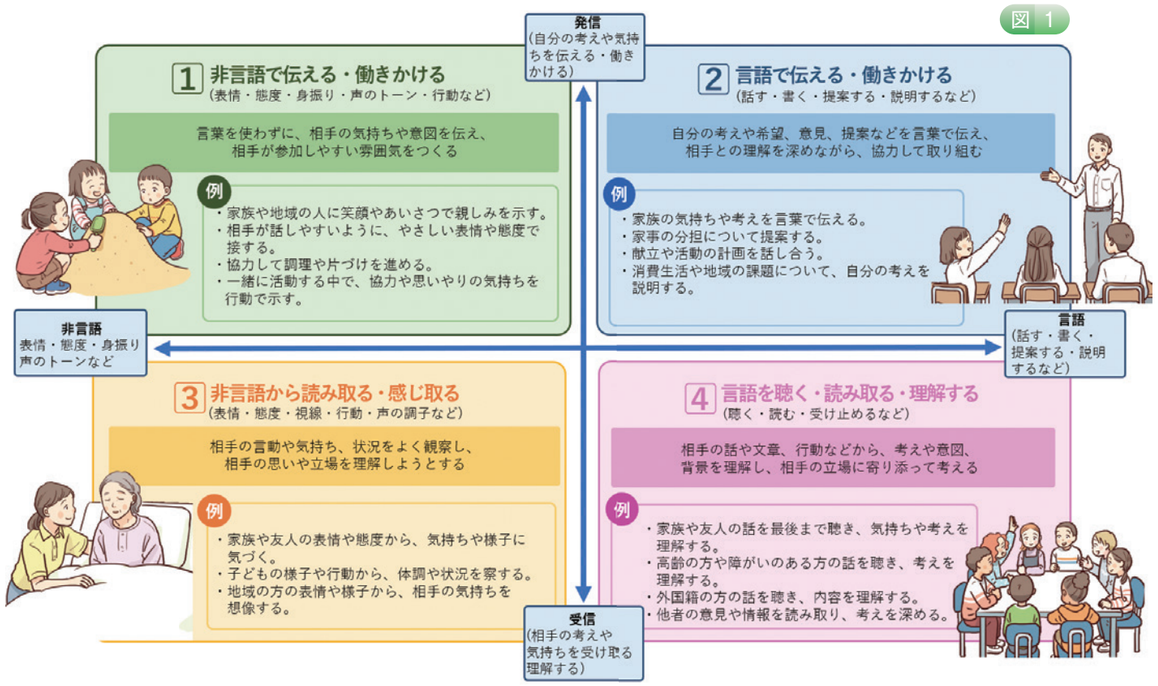
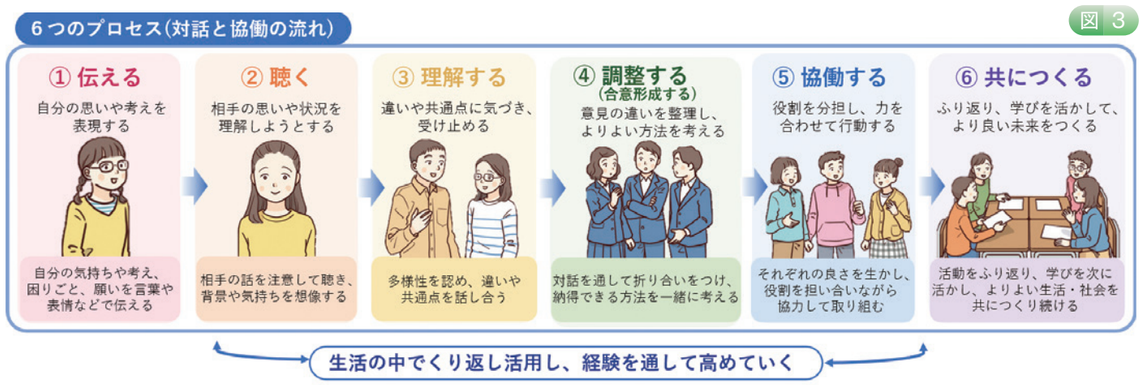


図 2



図 3



CASE

ジッセン

小学校

人と人との関わりの中で育まれるコミュニケーション力。本実践では、年齢や立場の異なる地域の方々と関わる機会を通して、子どもたちの豊かなコミュケーション力を育むこと、そして、身につけたコミュニケーション力を生かして、家庭生活をよりよくしようと考え、主体的に行動する子どもの姿を目指しました。



福島大学附属小学校

大沼 美里

Onuma Misato

「食」から広がる地域との絆





コミュニケーション力と生活実践力を育む学び

探究の時間と家庭科の「クロスオーバー」を目指して

本校の総合的な学習の時間（以下、探究の時間）において、５年生では地元福島市の「食」に関わるひと・もの・ことの魅力や課題をテーマにした探究に取り組んでいます。福島市は豊富な果物や伝統食など、恵まれた食文化をもっていますが、学習を進めていくとその魅力や課題について詳しく知らない子どもが多いことがわかりました。そこで「調べて終わり」の学習にとどめず、子どもたちが実際に地域に出て、地域の方と直接関わる「生きた学び」にすることを大切に学習を進めていくことにしました。そうすることにより、地域の方々との関わりを通して「コミュニケーション力」を育むことができるとともに、探究の時間での学びを家庭科の学びへと多角的に結びつけ、生活を豊かに創造する力を養うことができると考えました。

対話を引き出すインタビューとコミュニケーション力の育成

❶「問い」を整理し、地域へ飛び出す

まず、地域の人々がどのように地域の「食」への魅力や課題を捉えているのかを調べるために、駅前広場や商店街などで街頭インタビューを実施しました。年代を問わずたくさんの方に協力していただき、多くの情報を集めることができました。また、桃農家や円盤餃子発祥の店、行政のごみ政策担当者などを訪ね、専門家へのインタビュー活動も行いました。インタビューに行く前には、単に事実を聞くだけでなく「なぜその仕事を続けているのか」「どんな未来を目指しているのか」といった“相手の思いや願い”を引き出す質問づくりに時間をかけました。また、アポイントメントの取り方や敬語の使い方、話を聞く姿勢などについて話し合い、場に応じたマナーやコミュニケーションの基本についても考えました。



❷ 異世代との対話がもたらした意識の変化

最初は緊張していた子どもたちですが、地域の人々の温かい眼差しや情熱にふれ、次第に表情が和らいでいきました。ふり返りからは「最初は声をかけるのがこわかったけれど、地域の人たちも自分と同じことを課題に感じていると聞いて、解決したい気持ちが高まった。」「観光物産館の館長さんの思いを聞いて新しく気づいたことがあった。熱い思いをもって取り組んでいる姿勢を見習いたい。」といった声が聞かれ、対話を通じて人と関わることのよさを実感している子どもの姿が見られました。





家庭科への学びの広がり

探究の時間でのインタビュー活動は、家庭科の学びへと広がっていきました。７月に実践した「わくわくクッキング～ゆでる調理～」の題材では、家庭で調理するゆで野菜サラダについて話し合う際に「家族が好きな野菜を入れたいから聞いてみようかな。」「いいね。夏が旬の野菜も入れたいな。」「確かに。おじいちゃんが枝豆を育てているからそれを使ってサラダにしようかな。おじいちゃんにお願いしてみよう。」と話す子どもの姿が見られました。探究の時間での経験から、事象について他者と対話することで新たな気づきを得ることができると実感した子どもたちは、友達や教師、さらには家族と以前より積極的に対話をするようになったようです。また、このような子どもの変化は、家族形態の多様化により家庭内でのコミュニケーションが減少する傾向にある現代社会において、家族のつながりを深める上で大きな意味をもつのではないかと考えています。

地域とつながる家庭科教育の可能性

本実践を通して、子どもたちは地域の人々と対話する楽しさや大切さを知り、主体的なコミュニケーション力を身につけています。そしてコミュニケーション力を身につけた子どもたちは、家庭科の学びの中でも自分や家族の生活をよりよくするために、主体的に話し合い、課題を解決しようと考える姿が見られるようになりました。このような学びを続けていくことで、自分や家族の生活と地域の未来を主体的に考える「生活実践力」の高まりへとつながっていくと考えます。探究の時間と家庭科の学びを意図的につなぐことは、教科の学びを生かして豊かな生活や社会を創り出す一歩となるのではないでしょうか。今後も地域という豊かなフィールドを生かし、人と人との温かい関わりの中で育つ学びを大切にしていきたいと考えています。

CASE

ジッセン

中学校

地域とのつながりや「対話力」の育成に注力している本校での、障がい者施設と連携した授業実践を紹介します。生徒が互いの「幸せ」や得意・苦手について語り合い、ゲストティーチャーから「福祉」の本質を学ぶことで、思いやりの行動もバリアフリーであると気づき、共生社会への理解を深めることができた取り組みです。



福井県福井市足羽第一中学校

柘植 泰子

Tsuge Hiroko

「対話」でひらく 福祉と共生の学び

地域・障がい者施設とつながる、中学生のコミュニケーション力育成

「対話で育つ」を研究主題にした本校の実践研究

本校は、福井市東部の自然豊かな地域に位置しています。地域とのつながりが非常に強く、学校行事には多くの地域の方々がかかわってくださり、生徒たち自身もボランティアとして地域行事の企画・運営に携わる機会が多くあります。

こうした環境のもと、本校では近年、学校全体で「対話力の育成」に取り組んでいます。今年度は研究主題を「対話で育つ」とし、生徒と教員がともに対話力を高め合えるよう実践を重ねています。特に注力しているのが、縦割りの少人数グループで一つのテーマについて語り合う「あすいちラウンドテーブル」の開催です。年間を通して計8回ほど実施しており、本年度は、学校教育目標に基づいた、「『未来を切り拓く生徒』とは」を大テーマにし、回ごとに小テーマを設定しながら対話を深めています。この取り組みは名前を変えながらも今年で5年目になります。当初は教員が主導で進めていましたが、現在では生徒たちが展開を考えたり進行をしたりして行われています。今後は生徒がテーマを考えることも視野に入れて研究を進めています。

また、教員も「教員のあすいちラウンドテーブル」を実施しており、日頃から考えていることや相談したいこと、研修で学んできたことなど、機会がなくてなかなか相談できないことについて、語り合っています。

家庭科における「対話」と「福祉」

家庭分野の授業においても効果的に対話を取り入れたいと考え、地域性を生かした活動を模索してきました。これまでも校区のこども園訪問を行い、幼児の育ちにかかわる授業は定着してきていますが、今後はさらに「福祉」の視点を取り入れ、多様性と向き合い、地域の人々と協働する意義を深めたいと考えていたところ、今回の実践の機会を得ることができました。

障がい者施設との連携のきっかけ

本実践のきっかけは、地域の福祉型障がい児入所施設「足羽学園」の職員の方からいただいた一本のお電話でした。当時、同施設から本校に通う生徒がおり、「その生徒への理解を深めることを含め、福祉についての授業を一緒につくれないか」というご提案でした。学校としても願ってもないお話であり、喜んでお引き受けすることにしました。

「幸せ」の共有から深める福祉・共生の授業

授業は、生徒自身が「自分」を見つめ直すことから始めました。自分の得意なこと、苦手なこと、幸せだと感じることをグループで共有し、一人ひとり違っていることを確認します。次に、グループから一人を選び、その子の得意・苦手や幸せを踏まえて「その人が幸せに過ごせるために、自分たちは何ができるか」を話し合いました。その際、選ばれた生徒はあえて議論に入らず静観し、自分に向けられる配慮を客観的に受け止める時間としました。

発表では、話し合った生徒と静観していた生徒の双方から思いを語ってもらいました。「その子の幸せ」を真剣に考えたプロセスと、それを嬉しくも照れくさそうに聞いていた表情が重なり、温かい対話の場となりました。

その後、ゲストティーチャーから「障がい」についてお話をしていただきました。障がいを「もっている」「ある」「感じている」の違いについて身近な例で説明し、「障がいは誰にでもあり、特別なことではない」と教えてくださいました。さらに「福祉とは普段の暮らしの幸せを追求すること。バリアフリーとは生活の『不便』や『難しさ』をなくすこと。」という言葉に、多くの生徒が深くうなずいていました。

生徒のふり返りには、「班の友達の幸せを考えて話し合うのは相手を想う時間になり、相手が嬉しそうにしてくれたのが自分も嬉しかった。」「バリアフリーといえばスロープや点字ブロックなどの設備が整っていることだと思っていたけれど、相手を思いやる言葉や行動でその人を受け入れることもバリアフリーなんだとわかった。」などの言葉がみられ、現場で福祉に携わるゲストティーチャーの言葉だからこそ、生徒たちの心に深く響いたと感じています。

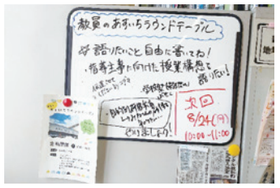
教頭として、学校と地域をつなぐ

本校では学級数の関係上、家庭科の専任教員が教頭である私一人しかおらず、他教科の先生方に免許外で授業を担当してもらっている現状があります。こうした状況下で、専門知識をもつゲストティーチャーの存在は非常に心強いものです。

教頭という立場だからこそできる役割として、今後も外部の豊かな人材と現場の先生方を積極的に「つなぐ」存在でありたいと考えています。







職員室に設置されたホワイトボードに、「教員のあすいちラウンドテーブル」で話題にしたいことを自由に書き込みます。

「教員のあすいちラウンドテーブル」の様子



「あすいちラウンドテーブル」の様子



この回のテーマは「一中生が身につけるべき力について」



INFORMATION
ヒロガル

“遊び”がもたらすコミュニケーション

近年、ボードゲームの人気が世代を超えて広がり、関連カフェも全国に500店舗以上と増えています。今回はボードゲームカフェ「JELLY JELLY CAFE」の運営やオリジナルゲームの企画・製造を手がける株式会社ピチカートデザインに、アナログな“遊び”がもつコミュニケーションの可能性についてお話を伺いました。



株式会社ピチカートデザイン
代表取締役 白坂 翔 さん
広報 オギ ユカ さん



「ボードゲームカフェ」という場をつくったわけ

私も子どもの頃はテレビゲーム世代で、ボードゲームにふれたのは20代の頃でした。友達が持っていたボードゲームで一緒に遊んだことをきっかけにその世界に魅了され、いろんなボードゲームを集めるようになりました。「友達と遊びたくても、大きな箱を持ち運ぶハードルが高い。ならば、ゲームが揃っていてみんなが集まれる場所をつくろう」と思ったのが「JELLY JELLY CAFE」の始まりでした。

その後、東日本大震災後に「電気を使わない遊び（非電源ゲーム）」が注目されたことや、ソーシャルディスタンスが求められたコロナ禍を経たことで、「同じ場所に集まり、顔を合わせて遊ぶこと」自体の価値が大きく変化してきたと思っています。

デジタル時代にあえて選ぶ「対面で集まる贅沢さ」

いまはスマホ1台で遠くの人とゲームも会話もできる時代です。だからこそ、わざわざ1つの場所にみんなが集まって顔を合わせるボードゲームは、とても「贅沢な遊び」なんです。その贅沢さがあるからこそ、友達同士はより深い仲になり、初対面の人とも自然に打ち解けられる魅力があります。

ボードゲーム制作の裏に込められた「想い」や「仕掛け」

制作で最も大切にしているのは、「誰でも手軽に楽しめること」です。カフェを訪れる多くが初心者だからこそ、すぐに輪に入れるシンプルさを意識しています。

1つのゲームが完成するまでには、ルールづくり、設計が一番大変です。「カードを1枚入れて遊ぶ」「2枚に増やしてみる」「ゼロに戻す」といった調整を何十回も重ねます。試行錯誤を繰り返し、全員が夢中になれる「一番面白いポイント」を探り当てていきます。

シンプルなゲームのよさ

●初対面でも初心者でも、すぐに楽しさに没頭できる

誰でも一瞬で理解できるシンプルさがあるからこそ、初めて遊ぶ人とも一気に盛り上がり、会話が生まれます。

●ルールや難易度を自在に調整できる

デジタルゲームと異なり、ボードゲームは遊ぶ人の年齢やスキルに合わせてルールを柔軟に変えられることが強みです。例えば、本当はカードの文字を組み合わせて３文字以上の言葉をつくるゲームだけど、小さな子どもがいるから２文字以上の言葉でOKにする、というようにハンデの調整が簡単にできるため、誰も取り残さずにみんなで楽しむことができます。



白坂さんが企画として制作に深く関わった『はぁって言うゲーム』（発売：幻冬舎）。いろいろなアクションのシチュエーションを当てる。

＼ “遊び”を通したコミュニケーションの魅力 ／

1 自然な会話

初対面の人と初めて会話をするのは、大人でも子どもでもハードルが高いものです。しかし、目の前にボードゲームという「共通の目的とルール」があることで、ゲームの展開に合わせて「どうする?」「やった!」「悔しい!」といった感情が自然と言葉になり、無理なく会話が生まれていきます。

2 「人となり」が見える

同じルールで遊んでいても、「一発逆転を狙って大胆に動く」「慎重にコツコツと点数を重ねる」など、プレイスタイルにはその人の性格や価値観が表れます。日常のやり取りでは見えない友達の意外な一面に気づけるのも、ボードゲームでのコミュニケーションの面白さです。

3 言葉以上の情報量

対面で卓を囲むと、言葉だけでなく、相手の何気ない視線、カードを出すときの迷い、声のトーンや息遣いまでがリアルに伝わってきます。相手の素の表情や心の揺れ動きを感じ取れるのは対面ならではの醍醐味です。この「非言語なやり取り」の多さが、人と人との距離をぐっと縮めます。

学校で使える! ボードゲームで アイスブレイク



長期休みにもおすすめ!

つくろう! ボードゲーム制作キット

真っ白なカードやコマ、サイコロなどが入った「自分だけのゲームを作れる」キット。自分でルールを考えたり色を塗ったりしてオリジナルのゲームをつくれます。

発売：JELLY JELLY GAMES　定価：3,630円（税込）





「は」と「み」と「つ」があるな…「はちみつ」!

ミツカルタ

場に並んでいるひらがなカードを3文字以上使った言葉をみつけるゲーム。学年に合わせて「2文字以上でOK」にするなどの柔軟なルール変更が可能。

プレイ人数：2〜6人　プレイ時間：5〜10分
発売：JELLY JELLY GAMES
定価：1,650円（税込）



次は きいろの人!

YUBIBO（ユビボー）

カードの指示に合わせて指同士を棒でつないでいくゲーム。全員で力を合わせて目標達成を目指す「協力型ゲーム」は、年齢や得意・不得意によって勝敗の偏りが出ず、学校での活用におすすめです。



プレイ人数：2〜8人
プレイ時間：5〜10分
発売：JELLY JELLY GAMES
定価：2,420円（税込）



Q&A

今号のテーマ

コミュニケーション力どう育てる？

家庭科での「コミュニケーション力」って何だろう？



最近では、中学生の過半数が親子間のやりとりに週2、3回以上LINEやメールなどを使っています※。一方、「親は会話で様子を聞きたいが、子どもは気持ちを察してほしい」というすれ違いもあります。AI時代の今、よりよい生活や人間関係をつくるコミュニケーション力をどのように育てればよいでしょうか。

※NTTドコモ モバイル社会研究所「モバイル社会白書 2025年版」による

Q1 家庭科での「コミュニケーション力」とは？

単に意見交換をする力ではなく、生活の課題を他者と協力しながら解決するための“生活の対話力”です。生活課題を対話で捉え、協働して改善する過程において、他者理解や自己理解、人との関係、価値形成など生活に欠かせない力だと考えます。この力を育むために大切なのは、子どもの文脈で課題を共有し、協力して解決する学習経験を積み重ねることです。

Q2 話し合いが形式的、一般的になって深まらないのはどうして？

生活経験の差や多様な価値観、実習中心で、共通の土台がつくりにくいという家庭科の特性が影響しています。答えが一つではないため、話し合いが拡散しやすく、正解を求めがちです。また、近年はICT活用が増え、話し合いの機会が減っています。家庭科の話し合いは、生活の違いや他者の考えを知ることに意味があります。生活の具体を共有しながら価値を再認識する過程が重要となります。

Q3 どうすれば対話が深まる？

対話のゴールは生活を再認識することであり、それは意図的な仕掛けと構造で深まります。生活の葛藤や選択場面を示し、根拠をもって判断する対話へ導くことが、意思決定につながります。価値判断の理由や生活の構造に気づかせるには、次のような問いが有効です。

- 事実を問う　「実際どうしてる?」→生活のリアルを出す
- 違いを問う　「立場が違うと?」→他者の見える化
- 理由や根拠を問う　「どうしてそう思う?」→判断材料
- 価値判断を問う　「どちらが望ましい?」→生活構造から判断

Q4 AI時代のコミュニケーション力を家庭科でどう育てる？

人間にしかできない“生活の対話力”が一層重要となります。AIは感情を推測できても、生活の文脈を読み取り、寄り添い、関係を築くことはできません。情報を判断し、行動を選ぶのは人間です。

- 生活の文脈を読み取り、状況を判断する力
- 言語や文化の違いも含め、他者の気持ちや価値観の違いを理解する力
- 根拠をもとに話し合い、合意形成・意思決定する力
- 自分の生活を再認識し、改善につなげる力

子どものことばに耳を傾け、
思いを丁寧に受け止めることが、
対話の第一歩。
何でも言い合える雰囲気や関係づくりが
子どもの対話を支えます。



先生方の疑問を募集中！

「Q&A」では、授業づくりや教育現場での工夫について、先生方の疑問・お悩みを募集しています。ぜひお気軽にご質問ください。

次回のテーマは
「家庭科とAI」

ご質問の
応募はこちら！

KGK JOURNAL Vol.4家（通巻420号）非売品

令和8年10月7日印刷　令和8年10月14日発行
発行人：井口 廣之　　発行所：開隆堂出版株式会社
〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
(03)5684-6121（営業）、5684-6118（販売）、5684-6116（編集）
https://www.kairyudo.co.jp/

本資料は「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されたものです。

開隆堂出版株式会社
本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 03(5684)-6111

北海道支社　〒060-0042 札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階　011(231)0403
東北支社　〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階　022(742)1213
名古屋支社　〒461-0004 名古屋市東区葵1-15-18 オフィスサンナゴヤ9階　052(908)5190
大阪支社　〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16　06(6531)5782
九州支社　〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階　092(733)0174